

## 患者の語りから看護学生が捉えた慢性疾患を持つ人の看護

—腎センター実習記録内容の分析から—

宮堀 真澄<sup>1)</sup> 永田美奈加<sup>2)</sup> 榊 紘子<sup>3)</sup>

### The nursing of chronic disease patients whom a nursing student arrested from the talk of the patient

—An analysis of kidney center training record contents—

Masumi MIYAHORI Minaka NAGATA Hiroko SAKAKI

#### 要旨

本研究では、腎機能障害を持つ患者の語りから学生が捉えた慢性疾患を持つ人の看護を明らかにすることを目的に、腎センター実習での記録内容を分析した。その結果を以下に示す。

1. 慢性疾患を持つ人の看護として、対象を理解し看護師の役割やチームアプローチの必要性、社会資源の活用を学んでいる。
2. 対象の理解では、患者の疾患や透析の受け止め方、受容過程、セルフケアの状況、家族との関係性、社会的役割の変化、患者間の影響、また家族については心理面や協力体制について理解している。
3. 透析療法における看護師の役割では、精神面への支援、セルフケア確立に向けての指導的役割、家族への支援、自己実現への支援、透析看護における専門性と役割、リスクマネジメント、倫理面、環境面への配慮が必要と捉えている。
4. 学生は、透析における治療の意義や慢性疾患の特徴、心理的特徴を捉えセルフケアの意義や家族の役割を踏まえ本人・家族への支援、自己実現への支援のあり方、看護観、生きることなど学んでいた。

キーワード：患者の語り、看護学生、慢性疾患、腎センター実習、実習記録

**Summary :** In this study, we analyzed record contents from the kidney center training for chronic disease patients that a student ascertained from talks with a patient who had renal function disorder clarifying the nursing of the person which was necessary. The following results were obtained.

1. As for the nursing of chronic disease patients, I understand an objective throughout the life is learning the necessity of a team approach of a nurse this, and the necessity of practical use of social resources.
2. By the understanding of objective, the situation for self-care, a relationship with the family, the change of social roles, influence between patients understand psychological side of the cooperation system about the family of the patient with disease and expections to how to stop dialysis, a reception process.
3. Support, of the psychological mind side, the leadership role towards self-care establishment, family support, self-realization support specialty the dialysis nursing role, risk management, an ethical, considerations to along with environment issues a nurse to in dialysis medical treatment will need.
4. Regarding what students learned, I found a significance towards treatment in dialysis and the characteristic of the chronicity, as of psychological characteristics and learned the significance of self-administration support to the person himself an hisfamily, an ideal method of the support towards self-realization.

**Key words :** The talk of the patient, nursing student, chronic disease, kidney center training, training record

---

看護学科 1) 教授 2) 助手 3) 助手

## I. はじめに

慢性疾患を持つ人のセルフケア確立への看護援助として正木は<sup>1)</sup>、「セルフケアを援助していくとは、単なる自己管理を促すことではなく、患者自身が健康的で安寧な生活を送っていけるよう、患者の持てる力を信じて、患者の自立を支援しながら関わっていくことである。患者が持てる力を最大限発揮できるような援助的関わりは、患者と共に創り出すという看護専門職としての力量が問われる技術であろう。」と述べている。また、石井は<sup>2)</sup>、看護系大学の卒業時に必要な看護実践能力として慢性疾患を持つ人への療養生活支援を挙げ、慢性疾患を持つ人がセルフケアを生活の一部として受け止め、その人なりの健康生活を維持するのを支援するための能力の重要性を述べている。このように慢性疾患を持つ人への支持的援助能力を高めるためには、患者を全人的に理解していくことが望まれ、共感的理解等のスキルを育てる教育が非常に重要になってきていると考える。

A短期大学の成人看護学実習では、成人期にある人々の健康障害の状況に応じた看護の学習内容の一つとして、腎センターでの見学実習を実施している。この実習を組み入れたのは、透析患者は治療そのものが終生にわたり、現実的「死」と直面し、様々な心理社会的影響を受けつつセルフケアが求められるため、学生の慢性疾患を持つ人への支持的援助能力を養う学びの場に有効と考えたからである。腎センター実習では、患者の語りから日常生活や疾病に対する受け止め方、セルフケアの状況、患者を支える家族の思いを理解し、慢性疾患を持ちセルフケアを必要とする人の自己実現を支える看護の役割を学ぶことを目的とし実習を行っている。この実習では、病気を持つ人の自らの思いを語る話の流れにどのように沿うことができるかを大切にしている。

先行研究において、学生の慢性疾患患者に関する理解の傾向や、外来実習と腎センター実習で捉えた看護の比較の研究は見受けられたが、腎機能障害を持つ生活者としての患者の語りを聴くことを通し学生が捉えた慢性疾患を持つ人の看護を分析した研究は少ない。そこで、今後のさらなる実習の充実に向け学生の学びを評価する必要性があると考え分析を行ったので報告する。

## II. 研究目的

腎機能障害を持つ患者の語りから学生が捉えた

慢性疾患を持つ人の看護を実習記録内容を分析し明らかにする。

## III. 研究方法

### 1. 研究対象

平成18年度、腎センター実習を終了した学生は75名で、同意書が得られた71名(94.5%)の実習記録内容を分析対象とした。

### 2. 分析方法

腎センター実習の実習記録内容のうち「看護の考察」について記述された内容を、Berelsonの内容分析の手法を用い、単文を1記述単位とし、コード化した。次に内容の類似性、同質性でサブカテゴリー化し、抽象レベルでカテゴリー化したものを単純集計した。分析については、研究者間で検討を重ね、信頼性の確保に努めた。

### 3. 用語の定義

本研究で用いる「学び」とは、腎センター実習での患者の語りから、またカンファレンスを通して学生が捉え実習記録の記入によって整理された学生の認識とする。

### 4. 腎センター実習の概要

腎センター実習の位置づけは、成人看護学実習の目的を達成するために、看護過程を展開する病棟実習7週と、「救急実習(救急外来・ICU)」「健康増進センター実習」「腎センター実習」を各1日実施している。

実習時期は、成人看護学実習の最終クール前後1週間に設定している。1グループの学生数は5~6人とし、実習時間は8時30分から15時30分である。事前学習として、①腎臓の働きと腎不全②透析の原理と条件設定③透析と合併症について学習し実習に望んでいる。

実習指導体制は、教員1名と腎センター係長である実習指導者1名である。

実習方法は、学生は通院する患者1名を受け持ち、シャント肢の清潔から体重測定、穿刺の実際、透析中、透析終了後の止血確認や体重測定までの過程を付き添い、観察や具体的援助の実際を見学し理解する。患者選択にあたっては、実習指導者が決定し、患者の同意を得られた場合としている。職員間のミーティング後、実習指導者より腎センターの概要説明を受ける。血液透析装置について

は、臨床工学技士より説明を受け理解を得ている。ベッドサイドでの患者との直接コミュニケーションを取る時間帯は、患者の状態も考慮し午前中30分程度、午後回収前30分程度としている。最後に、実習指導者も参加しカンファレンスを行い、学びを共有している。

実習記録用紙は、①患者のプロフィール（透析中の患者の経過）、②患者との関わり（セルフケアの状況について、人工透析に対する認識・受け止め方について、社会的側面について、家族について）、③看護の考察を記載する構成となっている。

### 5. 実習施設の概要

- 1) ベッド数：実習施設であるA病院  
腎センター30床
- 2) 患者数：入院患者4～5名、  
外来患者25～26名
- 3) 職員数：看護師10名、医師1名、  
臨床工学技士5名
- 4) 看護体制：固定チームナーシング  
(患者数、職員については平成18年度の状況)

### 6. 倫理的配慮

平成18年度成人看護学実習オリエンテーション時、研究目的と方法について口頭および書面で説明した。説明の内容は以下の通りである。1) 研究に使用するものは、提出された実習記録のみであること。2) 研究への同意・不同意は自由意思であり、実習評価には影響しないこと。3) 記録の使用に際し、プライバシーは厳重に保護されること。4) 記録は研究以外の目的には使用しないこと。5) 研究の途中経過や結果については、いつでも問い合わせができること。6) 研究への同意撤回はいつでもできること。7) この研究は、今後の実習指導に役立てることを目的にしていること。

A病院へは、研究の趣旨・研究内容を説明し同意を得ている。また、本研究は日本赤十字秋田短期大学研究倫理審査委員会の承認を得ている。

### VI. 結果

腎機能障害を持つ患者の語りから学生が捉えた慢性疾患を持つ人の看護の内容分析結果(表1)分析の結果、総コード数は1058で、25サブカテ

表1 「慢性疾患を持つ人の看護」学びの内容分析結果

番号	カテゴリー	サブカテゴリー	n = 1058
1	透析療法における看護師の役割	①精神面への支援	137 (12.4%)
		②セルフケア確立に向けての指導的役	128 (11.6%)
		③透析看護の専門性と役割	71 (6.4%)
		④家族への指導・支援	47 (4.3%)
		⑤透析室におけるリスクマネジメント	35 (3.2%)
		⑥自己実現への支援	29 (2.6%)
		⑦透析看護における倫理	15 (1.4%)
		⑧環境面への配慮	5 (0.5%)
		小計	467 (44.1%)
		2	対象理解 (患者)
②セルフケアの状況	61 (5.5%)		
③受容過程	44 (4.0%)		
④家族との関係性	42 (3.8%)		
⑤患者間の影響	25 (2.3%)		
(家族)	⑥社会的役割の変化		12 (1.1%)
	小計		306 (28.9%)
	①家族の協力体制		23 (2.1%)
	②家族の心理面		22 (2.0%)
	小計		45 (4.3%)
3	学生の学び	①セルフケアの意義	61 (5.5%)
		②心理的特徴	44 (4.0%)
		③慢性疾患の特徴	35 (3.2%)
		④看護観	25 (2.3%)
		⑤慢性疾患患者をもつ家族の役割	7 (0.6%)
		⑥本人・家族への支援	4 (0.4%)
		⑥透析における治療の意義	4 (0.4%)
		⑥自己実現	4 (0.4%)
		⑦生きることの捉え方	3 (0.3%)
		小計	187 (17.7%)
4	チームアプローチの必要性		34 (3.2%)
5	療養生活を支える社会資源の活用		19 (1.8%)

ゴリー、5 カテゴリーが形成された。カテゴリーをコード数の多い順に示すと、1. 透析療法における看護師の役割が467 (44.1%)、2. 対象の理解が351 (33.2%)、3. 学生の学びが187 (17.7%)、4. チームアプローチの必要性が34 (3.2%)、5. 療養生活を支える社会資源の活用が19 (1.8%)であった。

カテゴリー毎のサブカテゴリーと具体的内容は下記の通りである。(以下、カテゴリーは番号で、サブカテゴリーは『』で示す。)

1. 透析療法における看護師の役割については、『精神面への支援』『セルフケア確立に向けての指導的役割』『透析看護の専門性と役割』『家族への指導・支援』『透析室におけるリスクマネジメント』『自己実現への支援』『透析看護における倫理』『環境面への配慮』の8項目に分類された。

『精神面への支援』では、「看護師は、透析中経過だけを見るのではなく、患者の心の奥にある声や誇りにも気を配り心のサポートも必要。」「危機モデルを用いて患者がどの過程にあるか理解し、話を傾聴することを優先したり、現実を受け入れるよう説明・指導していくことも必要。」などであった。

『セルフケア確立に向けての指導的役割』では、「セルフケアの状況、理解度、協力者の知識の有無、社会資源の使用の有無や程度など幅広く患者の今ある現状について理解し指導を行う。」「生活背景やセルフケアの状況を把握し、思いを尊重しながらできていることを認め、できていないことは具体的指導を行い、セルフケア行動がとれるよう支えることが大切。」などであった。

『透析看護の専門性と役割』では、「腎不全や透析に対しての知識を十分身に付け、根拠づけた説明ができるよう普段から努力する。」「穿刺部に対する痛み、食事摂取量、表情など様々な面から観察・確認を行い苦痛を伴っていないか、病状の悪化の恐れがないか正しく判断する必要がある。」などであった。

『家族への指導・支援』では、「患者を支える家族の存在は大きく、患者が家族に抱く思いと家族が抱く思いの双方を理解してお互いの気持ちを共感し、今後も協力し合って生きていけるような関係づくりを手助けすることも看護の大事な役割である。」「家族にとっても役割の変化や患者を支える負担や様々な思いがあることを理解し、家族を含めた関わりが必要。」などであった。

『透析室におけるリスクマネジメント』では、「感染を起こさないよう清潔操作を徹底し、透析前中後の観察を的確に捉え血圧の変化に注意し、適切な判断と対応を行っていく必要がある。」「シヤント部の感染には十分な注意が必要だが、原疾患の治療による副作用として易感染性にあるため感染予防が必要である。」などであった。

『自己実現への支援』では、「長い時間がかかってもその人自身の幸せの形が見つかるよう、陰で支えるのが看護の役割ではないかと考える。」「その人らしく生活できることを支えることが、治療を継続する意欲に繋がるのではないかと思う。」などであった。

『透析看護における倫理』では、「偏見や差別行為をなくすよう、もっと一般市民に透析について知ってもらう機会を増やし、思いやりのある行動ができるようにしていくべきだと考える。」「一期一会の大切さや患者との関わりを大切にする姿勢を持ち続け、看護を実践していかななくてはならない。」などであった。

『環境面への配慮』では、「リラックスして透析を受けられるような環境作りが重要であり、音楽を流すなど環境への配慮を行っていた。」「同じ部屋で透析を行っているため、人間関係がうまくいかない患者さん達も出てくると考えられるので、気分良く受けられるためには、人間関係への配慮は重要である。」などであった。

2. 対象の理解では、患者本人と家族について捉えていた。患者の理解については、『現在の受け止め方』『セルフケアの状況』『受容過程』『家族との関係性』『患者間の影響』『社会的役割の変化』の6項目に分類された。

『現在の受け止め方』では、「病気とは一生つき合っていくものであるということを一度は受容していても、どこかで病気が進行しているという恐怖を感じているのではないかと考えられる。」「年2回開催される交流会に積極的に参加したり、スポーツ観戦するなど、楽しみやストレス発散法を自ら見つけていくことができている。」「女性にとってボディイメージの変化は受け入れ難く、周囲からどんな目で見られるかと気にしたり、長袖を着たりと様々な工夫をされているのが分かった。」など疾患・透析の受け止め方、自己実現、ボディイメージの変化等であった。

『セルフケアの状況』では、「透析終了時ドライウエイトぴったりの体重でおさえることができ

ており、心胸比も48%とかなり良好な状態で透析を行っていた。」「長期に渡って透析を行っている人は、検査値をみてカリウムやリンの値が高い時は食事について振り返り、改善点など自分自身で行うことのできる能力が身に付いている。」などであった。

『受容過程』では、「今までに様々な葛藤があったと推察されるが、家庭を持ち家業を支え透析患者との活動等様々な出会いや、自己洞察を重ねたことで価値観の転換や自己の再構築がなされたのではないかと考える。」「透析導入後は苦痛症状が改善され、実際に透析を経験することにより現実を受け止め、医師や看護師の働きかけや家族の協力、一緒に透析を受けている他の患者さんに関わっていくうちに不安は軽減し、自分だけではないと励みにもなり受容できたと考える。」などであった。

『家族との関係性』では、「長期間家族の支えを受けながら生活することを余儀なくされるため、家族に対して申し訳なさを感じ、心理的に葛藤を抱いてしまうといったことも多かれ少なかれあることも知った。」「家族の支え・絆があったからこそ、現在、明るく元気に透析を受けられているのではないかと思う。」などであった。

『患者間の影響』では、「一緒に透析を行っていた友人が2人とも亡くなってしまったことで、透析や正しい生活習慣を送ることがさらに重要であること、透析を行わないことは死に直結することがより理解でき、恐怖と共に治療に対しより積極的になった。」「自分の症状や心配事などをお互い相談したり共感することにより、精神的にも安定し、お互いに教育し合うこともある。」などであった。

『社会的役割の変化』では、「家族を養わなければならない状況で仕事を変えたり、やめなければならなかった。」「病院までのタクシー代や医療費等金銭面での心配もある。」「育児と並行し体調をコントロールしていくことは、容易ではない。」など職業や経済状況の変化、家庭での役割変化などを捉えていた。

家族の理解は、『家族の協力体制』や『家族の心理面』について捉えていた。

『家族の協力体制』では、「家族が協力して患者を理解することで、患者自身も透析を受けやすい環境が整い、生活していくことができるようになる。」「家族も患者が透析が必要であることを理

解し、送り迎えや生活の助け合いなど積極的な関わりにより精神面での大きなサポートとなっている。」などであった。

『家族の心理面』では、「家族も透析に対してこれからの生活についての不安、悩み、さらに自家用車で患者の送迎をする場合は、身体的ストレスや仕事の関係などの問題も抱えている。」「家族も同様に、透析をしなければ生きていけないことを受け入れるのに時間がかかったと考える。」

3. 学生の学びでは、『セルフケアの意義』『心理的特徴』『慢性疾患の特徴』『看護観』『慢性疾患患者を持つ家族の役割』『本人・家族への支援』『透析における治療の意義』『自己実現』『生きることの捉え方』の9項目に分類された。

『セルフケアの意義』では、「生涯にわたり治療を継続していく必要上、患者自身が健康管理や治療行動を実践していくことが大切であり、それを行うには意欲や必要性・方法を理解できる力、生活環境を調節できることなどが挙げられる。」「家族や職場の理解と協力で、本人ができる部分を尊重し不足している部分を家族や周囲が補い、本人が主体的に取り組むことができるよう支援することがセルフケアの継続において大切である。」などであった。

『心理的特徴』では、「透析のように苦痛や制限の伴う治療を長期にわたり継続する必要が生じたとき、そのことを受け入れたくない気持ちが働いたり治療に望みを抱くこともあると思う。」「透析をしている本人の本当の辛さというのは、経験している本人にしかわかり得ない感情でもある。」などであった。

『慢性疾患の特徴』では、「週3回の透析を行うことで身体的に負担がかかると共に、食事や服薬、運動など考えていかなければいけないことが多くあり精神的に負担がかかる。」「慢性疾患は、現在の問題が解決されても人生という発達に伴い、新たな問題が生じてくるのが特徴である。」「健康な人の価値観で動く世の中で病気と共に生きるのは容易なことではない。」などであった。

『看護観』では、「患者の思いを大切にし、身体面だけでなく精神的にもケアできるそんな思いやりをもった看護師になりたい。」「自分が生きていることに感謝し、生の重みを知ることが透析患者を理解していく第一歩である。」などであった。

『慢性疾患患者をもつ家族の役割』では、「生涯治療や自己管理が必要となることは、同時に家

族にとっても必要となる。」「家族が理解し協力することで、患者は頑張る勇気と強さをもらい、家族は患者のそのような姿を見てさらに頑張る力をもらうという相互作用があるように感じた。」などであった。

『本人・家族への支援』では、「患者個々によりセルフケア能力は違うため、生涯にわたる自己管理の大変さを理解し、家族と本人が協力しながら生活できるようにサポートしていくことが大事。」「疾病の理解とセルフケアを前向きにとらえ実行できるよう援助していくことが大切。」などであった。

『透析における治療の意義』では、「透析は、継続していかなければならないもので患者の命をつなぐものである。」「透析を行っていることで、生きることができるからだと考える。」などであった。

『自己実現』では、「患者それぞれの思いは違うと思うが、自分らしく生きること、慢性疾患を持ち、生活の様々な面に制限や苦痛があっても、生き生きと充実し、満足して生きることがその人の生活を支える糧となるのではないか。」「一生病気・治療と共に生活していかなければならないため、自分にとって楽しみを見つながらうまくつき合っていくことが大切だと思った。」などであった。

『生きることの捉え方』では、「患者の思いを聴き、改めて生きることの重さを実感した。」「透析患者と出会い、日々生きるために努力をしていることを知り、今までの生に対する自分の考えが情けなく思えた。」などであった。

4. チームアプローチの必要性では、「臨床工学技士の機械管理、透析導入し不安を感じている方への社会資源の活用や相談などを行う医療ソーシャルワーカー、食事管理の指導を行う栄養士など患者をサポートするために連携がとれている。」「医師、看護師、臨床工学技士、医療ソーシャルワーカー等全員が患者について確認し、多方面からアプローチすることが患者の大きな支えとなっている。」などであった。

5. 療養生活を支える社会資源の活用では、「障害者手帳の交付や特定疾患療養受領証、更生医療や障害者年金など社会資源の活用を医療ソーシャルワーカーと共に説明・提案していく事も必要。」「患者会などを紹介する事も援助の一つ。」などであった。

## Ⅶ. 考察

腎機能障害を持つ患者の語りから学生が捉えた慢性疾患を持つ人の看護では、5カテゴリーが形成されたが、その中でも1. 透析療法における看護師の役割が全体の44.1%を占めており、透析療法における看護師の役割の重要性と関わり方を学んでいる。

1. 透析療法における看護師の役割として、『精神面への支援』『セルフケア確立に向けての指導的役割』『透析看護の専門性と役割』『家族への指導・支援』『透析室におけるリスクマネジメント』『自己実現への支援』『透析看護における倫理』『環境面への配慮』など多面的に看護師の役割を捉えていた。

『精神面への支援』の重要性を学生が捉えていたのは、積極的傾聴という関わりから、患者の主観情報を客観的に捉え、慢性疾患患者の心理的理解につながり支持的アプローチの必要性を実感したものと考える。特に透析患者のような健康逸脱状態が永続する慢性疾患患者は、治療的な意味合いを持つセルフケアが求められ、それを実行するための知識や技術が必要となる。『セルフケア確立に向けての指導的役割』として、患者のセルフケアの状況や看護師の関わりの実際を目の当たりにし、コンプライアンスを高める上で有効な指導的・学習援助的アプローチの重要性を学んでいる。さらに、患者にとって透析療法導入という出来事は、命のある限り医療機器への依存を余儀なくされることを意味し、このことにより新たな環境への適応を求められることになる。このプロセスにおいて家族の支えはきわめて重要となり、生活を共にする家族へも様々な影響を及ぼす。『家族への指導・支援』として、家族に求められる対処を促して行くためにも基本的姿勢として患者を含んだ家族全体を支えたり、その家族に適したケア方法の確立への支援の大切さを学んでいる。

また、学生は『自己実現への支援』として、生涯にわたりセルフケアが必要な患者の自己実現を支える看護のあり方も考察されていた。宇田<sup>6)</sup>は、「腎不全看護とは、延命治療の手段として透析療法を選択した患者や家族の衝撃の深さを知り、疾病に対する患者や家族の反応と受容のレベルを診断し、円滑な治療が継続できるように、臓器移植および器械・器具・装置に依拠した状況下における健康回復と患者の自己実現を目指す活動を行うものである」と述べている。

学生は、透析看護の実践を見学し『透析看護の専門性と役割』の重要性についても学んでいる。看護師は、腎不全治療についての知識技術を習得し、日常の場面で起こる状況に即応した処置やケアが実践できることが要求される。ケアの質と高度な技術を持った看護師による安全性の確保を保証するためにも知識・技術を身につける必要性を強く感じた実習と思われる。学生は、腎臓の構造や機能・腎不全の病態・合併症や人工透析についてなど基礎的知識が不可欠であるため事前学習し実習に望んでいる。実際シャント音スリル等の観察方法を体験したり、指導者や臨床工学技士による臨床講義を受け、血液透析中に出現する合併症とその対応など詳しく学習する機会となっている。中には初めて理論と実践が結びつき学習の楽しさを実感したと感想を述べる学生もいる。見学や臨床講義を通し、関連内容を深めることができると考える。また、最近の地震など自然災害時の対処法などダイレクトに学習できる場ともなっている。

『透析室におけるリスクマネジメント』についても、院内感染や透析中における感染予防と臨床能力の必要性を捉えていた。学生は透析開始から終了時の操作を直接看護師の手技を見学し、基本的透析操作の徹底が習慣化されていることや、終了後感染性廃棄物として安全に処理される過程の実際も見学し、感染予防対策における看護師の役割の重要性を学んでいる。日々の実習で、手洗いの励行が感染経路を遮断する最も効果的な方法であることは承知のことではあるが、透析室は特に集団治療の場所であり、感染症を発症しかつ伝播しやすい環境下におかれているため、その重要性を認識したものと考える。患者の安全性の保証を確かなものとするためにも、医療従事者の臨床能力を確保したり、チーム医療を機能させるなど包括的アプローチが必要なことなど、より学習を深める必要がある。手洗い環境の整備とその重要性について継続的教育が重要と考える。

『透析看護における倫理』としては、アドボケートとしての役割や生命尊重と人権擁護について、また透析看護師の責任と義務を果たすための継続的自己研鑽について捉えていた。看護師の役割として、患者の利益に貢献することを第一義的な使命としており、今後も実習を通し看護倫理を構築していく責務を育成していく必要性を強く感じている次第である。実習評価として、「対象の尊厳

と人権の意味を理解でき、それを擁護する行動がとれる」を挙げているが全体の評価との比較の必要もあるため、今後分析が必要と考える。

『環境面への配慮』の必要性にも気づけている学生もいる。透析治療は4～5時間に及ぶためリラックスして透析が受けられる環境への配慮や、また長期間におよぶ治療から患者間の人間関係にも配慮したベッドの位置なども捉えられており、少数ではあるが、このような気づきができる感性を大事に育てていきたい。

次に多かったのは、2. 対象の理解であった。内容としては、『現在の受け止め方』として、疾患・透析の受け止め方やボディイメージの変化、自己実現についてであり、『受容過程』や『家族との関係性』『患者間の影響』『社会的役割の変化』など患者の心理的变化や生活面へどのように影響が及ぶすかまた、『セルフケアの状況』など具体的生活状況など幅広く対象を理解し、病気とともに生きる患者の心理面などを理解していた。これは、患者自身が最も学生に伝えたい内容が心理的側面でもあり、真剣に話される態度に学生は感動している。学生もまた患者を理解しようとする意識の高さを示している現れともいえる。心理的側面だけではなく、職業・経済状況の変化、家庭での役割変化など社会的側面に関しても理解し生活の多様性も捉えている。成人期は社会的役割の大きい時期でもあり、社会的側面の理解は慢性疾患患者を援助していく上では重要なことである。

家族については、『心理面』や『協力体制』の側面からの理解であった。患者とのコミュニケーションのなかから家族の状況も把握され、なかにはご家族の方が通院に付き添ってみえる方もおり、家族の理解につながっていると考える。

このように対象の理解が十分なされている要因の一つには、実習記録様式が日常生活におけるセルフケアについて、人工透析に対する認識・受け止め方について、社会的側面について、患者を支えている家族について記載する構成となっていることも考えられる。しかし、短時間ではあるが学生は、患者の語りを積極的傾聴をし追体験することができており、患者および家族の心理面・生活の多様性を理解することにつながり、成人看護学実習の目標である「対象の理解」を充たしていると言える。学生にとって患者の語りによって聴くこのような実習は、貴重な体験であり支持的援助のあり方を学習できる機会と考える。

3. 学生の学びでは、『透析における治療の意義』や『慢性疾患の特徴』『心理的特徴』を捉え、『セルフケアの意義』と『慢性疾患患者をもつ家族の役割』の特徴を捉え『本人・家族への支援』と援助の必要性を学んでいる。また、『自己実現』『看護観』『生きることの捉え方』など患者とのコミュニケーションを通して対象の理解につながり、自己理解も深まっているといえる。考察を深め自己の課題を見いだしている学生もいる。しかし、学生は様々学習しているが個人差がみられる。多くの学生が見学したことをより発展的に学習を深め今後の自身の有り様を明確化できることが望まれる。学習効果を上げるためにも実習前のオリエンテーションを充実させたり、カンファレンスでの教員の意図的関わりが必要と考える。今後も継続的に検討していきたいと考える。

腎センター実習は1日の見学実習ではあるが、このように様々な視点で生涯にわたりセルフケアが必要な人の自己実現を支える看護を考察することができたのは、3クール6週間の病棟実習後ということもあり今までの看護の経験により、視野が広がっているからと考える。しかし、看護師の役割と関連し、4. チームアプローチの必要性や5. 療養生活を支える社会資源の活用必要性に気づけている学生もいたが34件(3.2%)、19件(1.8%)と少数であった。関連職種間の情報の共有化場面を見学したり、実習場所がワンフロアであることから、実際の関わりを見るのが可能であり総合的な支援の必要性について考える実習環境にある。また、更正医療に関する説明などもカンファレンス時されており身体障害者手帳に関する事項や医療費助成制度について述べている学生もいるが、全体的に関係法規に関して苦手意識が強いと思われる。記述件数が少ないのは、学生の関心が学生自身の役割モデルである看護職に向かっているためと考える。腎不全医療は、多くの専門職が協働し全人的アプローチを必要とするチーム医療である。社会資源を活用しながらQOLの充実が図れるような関わり的重要性を学べる実習でもあるため学びを有効活用するためには、カンファレンスにおいて学びが統合できるような教員の関わりが重要であると考えられる。

#### Ⅷ. 今後の課題

今回、学生が最も多く捉えた『精神面への支援』や『セルフケア確立に向けての指導的役割』のカ

テゴライズした内容について、「セルフケア確立に向けた看護援助」の視点でどのようなアプローチ方法を見いだしているか、さらに分析する必要があると考える。

#### Ⅸ. 結論

腎機能障害を持つ患者の語りから学生が捉えた慢性疾患を持つ人の看護を明らかにすることを目的に実習記録内容を分析した結果、以下のことが明らかになった。

1. 慢性疾患を持つ人の看護として、対象を理解し、看護師の役割やチームアプローチ・社会資源の活用必要性を学んでいる。
2. 対象の理解では、患者の疾患や透析の受け止め方や受容過程、セルフケアの状況、家族との関係性、患者間の影響、社会的役割の変化、また、家族については心理面や協力体制について理解している。
3. 透析療法における看護師の役割は、精神面への支援、セルフケア確立に向けての指導的役割、家族への指導・支援、自己実現への支援、透析看護の専門性と役割、リスクマネジメント、倫理面、環境面への配慮が必要と捉えている。
4. 学生は、透析における治療の意義や慢性疾患の特徴・心理的特徴を捉え、セルフケアの意義や家族の役割を踏まえ本人・家族への支援自己実現に向けての支援のあり方、看護観、生きることなど学んでいた。

おわりに

腎センターでの実習は、単に透析患者を理解するに留まらず、慢性疾患を持つ人の看護を保健・医療・福祉の面からも学習できる場となっている。病棟での実習では学生全員が必ずしも慢性期の特徴を学べているとは限らず、それだけに腎センター実習の意義は大きいと考える。また、積極的傾聴というスキルを用い、慢性疾患を持つ人の語りに沿う関わり大切さを学ぶ機会ともなっており、是非このような実習方法を継続していきたいと考える。

謝辞

本研究を行うにあたり、記録の使用を快諾してくださった学生の皆様と腎センター実習にて熱意あるご指導・ご協力頂いたA病院腎センターの実



習指導者・スタッフの皆様に深く感謝致します。

#### 引用文献

- 1) 日本腎不全看護学会(編集)：透析看護，pp171, 医学書院，2005.
- 2) 石井邦子：「看護教育のあり方に関する検討会(第二次)」を終えて，看護教育，Vol.45(6)，pp435-436，2004.
- 3) 宇田有希：特集；透析看護における現任教育マニュアル①透析看護の概念認識，臨床透析4(4)，pp469-475，1988.

#### 参考文献

- 1) アーサー・クライマン：病いの語り，誠心書房，2007.
- 2) 梶山祥子他編集：慢性疾患をもちながら生きる人々へのサポート，南山堂，2000.
- 3) 島村美穂子・鳥海喜代子他：看護学生の慢性疾患患者理解の傾向について－腎センター実習における実習記録の分析から－，埼玉県立大短大部紀要，第1号，pp37-45，1999.
- 4) 田中克子・梅津美香他：成熟期看護学実習の外來実習と透析室実習で捉えた「看護」の比較，岐阜県立看護大学紀要，第4巻，1号，pp133-139，2004.
- 5) ピエールウグ：慢性疾患の病みの軌跡，医学書院，2005.
- 6) 正木治恵：糖尿病看護の実践知，医学書院，2007.
- 7) 南裕子監訳：慢性疾患を生きるケアとクオリティ・ライフの接点，医学書院，2006.
- 8) 森田美穂子・渋谷えり子：看護学生の慢性疾患患者理解の傾向について第2報－透析室実習における学生の実習自己評価の分析から－，埼玉県立短大部紀要，第3号，pp61-70，2001.